

私は8月27日から29日にかけて、長崎県対馬市で実施された海洋ごみに関する調査に参加した。これまでニュースや授業で「海洋ごみ問題」という言葉を耳にしてきたが、実際に現地に訪れて自分の目で確認することで、その深刻さを肌で感じる事ができた。本レポートでは現地での観察結果、関係団体の取り組み、今後の課題について順に述べる。



① 調査の目的と背景

近年、プラスチックを中心とする海洋ごみは地球規模で拡大しており、国連や環境省は世界全体で年間800万トン以上のプラスチックごみが海に流出していると報告している。これらは分解されにくく、やがてマイクロプラスチックとなり生態系を脅かす。実際にウミガメの体内からプラスチック片が発見された事例が報告されているほか、人間の食卓に上る魚介類にも影響を及ぼすことが懸念されている。日本の中でも対馬は特に深刻である。対馬は韓国からわずか50キロという位置にあり、海流の影響を強く受けるため、国内のごみだけではなく、海外からの漂着ごみが多く集まりやすい。こうした現状を踏まえ、今回の調査は「漂着ごみの現状を把握し、課題を考える」ことを目的として実施された。

② 船での学習体験

今回の2泊3日では長崎大学水産学部の練習船「鶴洋丸」に乗船し、海洋環境の研究方法や海の生態系に関する講義を受けた。実際に調査で使用する機器やごみを集める方法について学び、専門的な機械を使って目視観察を行った。観察結果、特に多かったのはプラスチック製品で、ペットボトルやレジ袋、発泡スチロール片が目立った。普段はなかなか触れることのない専門的な研究の現場を見ることができ、非常に貴重な体験であった。



③ 調査の方法と観察内容

8月28日には調査の中で椎根海岸に訪れた。調査では海岸を「陸側、中間、海側」の3つに区分し、幅3メートル×奥行き6メートルの範囲を設定して人口ごみを回収した。そして集めたごみはフレコンバッグ(大型の回収袋)に入れ、種類ごとに分類し記録した。調査の結果、陸側に最もごみが多く、ペットボトルや漁具が多く確認された。原産国不明が多かったが、韓国や中国といっ



た近隣諸国の文字がみられ、国外の生活が直結して海洋環境に影響を及ぼしていることを強く実感した。

④ 対馬 CAPPA の取り組み

厳原の交流センターで一般社団法人：対馬 CAPPA(Coast and Aquatic Preservation Program Association)の



活動についても学んだ。対馬 CAPPA は、単にごみを回収するだけではなく、行政・地域・

市民をつなぎ、持続的に問題解決に取り組む「中間支援」の役割を担っている。特に印象的だったのは2020年の一年間には、延べ1200名のボランティアとともに約8000 m²の海洋漂着したごみを回収実績である。



⑤ 今後の課題と私たちにできること

調査を通して、海洋ごみ問題の解決には以下の3点が重要だと考える。

- ・国際協力：近隣諸国と連携し、ごみの削減や処理について、協定を結ぶ必要がある。
- ・制限の整備：企業に対して環境に配慮した製品の設計やパッケージ削減を求める仕組みが不可欠である。
- ・市民の行動：一人一人がマイボトルやエコバックを利用し、使い捨てプラスチックを減らす努力を積み重ねることが大切である。

⑥ 感想とまとめ

今回の対馬調査を通して、海洋ごみ問題の深刻さを実際に見て体験できたことは大きな学びであった。漂着ごみの回収作業では圧倒的な量のプラスチックを前に無力さを感じ、人間の生活がどれだけ環境に影響を与えているのかを実感した。

またそれと同時に「小さな行動の積み重ねが未来を変える」という思いも強く抱いた。海

外からのごみが大半を占めており、「日本だけの努力には限界がある」という現実も理解できた。

私は今後、日常生活の中でプラスチック削減を心掛けるとともに、この問題を周囲に伝えることを実践していきたい。一人の小さな行動が未来の海を変えると私は信じている。